

## それぞれの育ち

長田瑞恵

### 遊びの中の学び

わが家の娘は三歳八か月、息子は一歳四か月を過ぎました。わが家の子どもたちは特別な習い事には通っていませんが、遊びや日ごろの生活の中での自然なやりとりを通して、さまざまなことを吸収しているようです。

たとえば、私は一度も娘に直接的に文字を教えたことはありませんが、娘はかなり早い時期から文字

に興味をもち始めました。保育園への持ち物には全て自分の名前が書いてありますし、保育園とやりとりしているノートに毎朝母親が何か書き込んでいるのを見ているためでしょう。自分が描いた絵を持って「S(娘の名前)って書いて」とねだりにやってきましたり、ノートや雑誌などをのぞき込んで「これ、なんて書いてあるの?」と尋ねたりするようになりました。

文字に対する興味が特になくなってきた三歳七か

月のころ、私は娘の興味につながる遊びを取り入れたいと考え、娘と一緒に言葉の中の音を取り出す遊びを始めました。

私たちが話す言葉は音の連続です。そのため、言葉を構成する音の一つひとつを対応する文字に置き換えるためには、連続音を文字単位に分割し、音を取り出すこと（音韻的意識<sup>註</sup>）が必要となります。たとえば、「トコヤ（床屋）」という音を聞いて、それが「ト」「コ」「ヤ」の三つの音から成り立っていることが認識でき、真ん中の音は「コ」であると取り出せることが必要です。そして、文字習得の基盤として、この「音韻的意識」が不可欠であると言われるています。しかし、「音韻的意識」といつても、何か特別な「勉強」が必要なわけではありません。昔から子どもたちが大好きなしりとりなどの言葉遊びが、「音韻的意識」を育てる役割をしていると考えられています。

私は、子どもたちの名前や食べ物の名前を使って言葉遊びを始めました。子どもたちの名前を呼ぶ時に、歌うような抑揚を付けながら、

「Sさんの『サ』は『サクランボ』の『サ』」

「H（息子の名前）君の『ハ』は『花火』の『ハ』」

と言ってみたり、

「今日はブ・ブ・ブドウのジュースかな？ リ・

リ・リンゴのジュースかな？」

と語頭の音を繰り返したりしてみせます。一つの音を繰り返すという活動が楽しらしく、娘もキャッキャと笑いながら、

「Sの『サ』は『サクランボ』の『サ』！」

と歌うように繰り返しています。しかし、まだまだ「音韻的意識」は充分ではないようで、脇で聞いていると思わず吹き出してしまうようなおもしろい間違いをたくさんします。

「今日のジュースは何かな？ ブ・ブ・リンゴ！」

「日君の『ハ』は『サ克蘭ボ』の『ハ』！」

時にはこのような名(迷?)ゼリフも飛び出しますが、そのようなやりとりまで含めて娘と笑い合いながら過ごす時間は、とても楽しいひとときです。

### 歩き始め

乳幼児の育ちはいろいろな面で個人差が非常に大きいと思いますが、移動や歩行も、子どもそれぞれの個性でずいぶん様子が異なるようです。

わが家の娘が一人で歩き始めたのは一歳三か月ごろでした。そして、息子もまた、一歳三か月ごろになって独力で歩けるようになりました。

歩き始めた時期はほぼ同じだったわが家の子どもたちですが、二人が歩き始めるまでの過程はかなり異なりました。娘は、歩き出す前はあまりはいはいをしようとしませんでした。何か欲しい時には「ウ、ウ」と声を出せば、母親の私がやってくれることがわ



かっていたからかもしれません。それでも、どうしても移動しなければならぬ場合には、壁や家具につかまって伝い歩きをしていました。そして、ある日、家具につかまっていた手を離し、数歩、とことこと進むことができるようになる、すぐに家の中を自由に歩き回れるほど、あつという間に歩くのがうまくなりました。そのころ撮影したビデオには、歩けるようになったのがうれしくてたまらないといった様子の娘の映像がたくさん残っています。

一方の息子は、姉の後をついて回りたい気持ちが強かつたらしく、ずいぶん早くからははいはいをするようになりました。最初のうちはおなかを床に付けた「ずりばい」でゆっくり移動していましたが、次第にそのスピードが上がり、最終的にはおしりを上げた「高ばい」の姿勢で、娘が歩くのに追いつけるような速さで移動するようになっていました。しかし、移動したい気持ちが強いにもかかわらず、息子はなかなか歩き出そうとしませんでした。家具にかまつてつかまり立ちはするのですが、移動しなければならなくなると、おもむろにははいを始めるのです。体の割に少し頭が大きい息子は、立ち上がるとバランスを崩して転んでしまうことも多かったので、家具にかまつている手を離すのが怖かったのかもしれない。

その息子も、ある日突然、とことこと歩き始めました。そして、いったん歩き始めると、どんなに転

んでも、もう、はいはいに戻ることはありませんでした。転んでしまっても、「よっこらしょー」という感じでもう一度座り直し、短い手足を一生懸命踏ん張って立ち上がり、またとことこと歩きます。

その姿からは、歩き始めたころの娘と同様に、歩くのが楽しくて仕方ないという喜びが伝わってきます。

娘も息子も、歩き始めた時期はどちらかといえばゆっくりでしたが、私は「そのうち歩くだろう」とのんびり考えていました。子どもの育ちは「速く進めばよい」というようなものではなく、一つひとつの時期を充分に楽しんで過ごすことが大切なのだと思います。そうしていれば、やがて機が熟した時に、子ども自らの力で次の段階へと移っていくだろうと思っています。

### 言葉と遊び

二人の子どもは、言葉の発達でもそれぞれ異なる

特徴がありました。

娘の初語は「ワンワン」でした。その後は、「オトータン（父）」などの名詞に混ざって、「ネンネ（寝かしつけ）」「ハイ（モノを渡す）」「ドウゾ（モノを渡す）」「イナイイナイ（いないいないばあ遊び）」といった人と人とのやりとりにかかわる語彙を獲得していきました。

それに対して、息子の初語は「オトータン（父）」「オカータン（母）」でしたが、その次に出た言葉は「オチタ（落ちた）」でした。モノを手当たり次第に投げ落としては、「オチター！」と自分で言うのです。その後も名詞だけでなく、「アッタ」「イタ」「デタ」など動詞の過去形が初期から多かったのが、息子には特徴的でした。モノの名前だけでなくモノの動き方に興味があるようで、語彙の内容もその興味を反映したもののように思えました。

二人の遊び方もかなり異なります。娘が赤ちゃん

だったころから一貫して大好きなのは、人形遊びやままごとです。小さな人形を大切そうにタオルでくるみ、母親の私がやるのと同じように抱っこ帯で自分の体にくくりつけ、小さな声で子守歌を歌いながら、部屋の中をゆっくりゆっくり歩き回ります。そして「やっと、寝た」などと言いながら、そうっと人形を布団の上を下ろし、毛布をかけた人形のおなかを軽く手でとんとんとさすっています。そんな時に私が話しかけようものなら、「大きな声を出さないで！ 赤ちゃんが起きちゃうでしょ！」と私がいかにいられてしまいます。その様子は、まるで小さなお母さんといったところです。

一方、息子はブロックや車のおもちゃが大好きで、人形にはあまり興味を示しません。ブロックをつなげては分解し、またつなげては分解し、ということを繰り返しては、うれしそうに笑っています。そして、ブロックを放り投げてから、私のほうに向かって

て「オチタッタター! (落ちちゃった)」と言うのです。

私が「そうね、落ちちゃったわね」と相づちを打つと、「ウン」と大まじめな顔でうなずき、またプロックを手に取り、つなげたり離したりを続けます。その姿は実験に熱中する科学者のようです。

中沢は、対人関係を題材としたごっこ遊びを好む「物語型」の子どもと、積み木を積み上げたり砂団子とがいたり指摘しています。わが家の二人の子どもを見てみると、娘が「物語型」、息子が「図鑑型」に対応するように思えます。もちろん、娘もまたモノへの興味を強く示す場面もありますし、息子も母親や姉の心の動きに敏感に反応します。「物語型」「図鑑型」はあくまでも「傾向」としてとらえられるものようです。

わが家の子どもたちを見ると、同じ親から生まれ、同じように育てられているはずの二人が、こ

んなにも異なる個性をもっているということが改めて不思議に思えます。そういう意味では、第一子の娘だけでなく、第二子の息子との関係もまた、私にとっては初めての体験の連続なのです。そして、二人の個性の違いがはつきりしてくるにつれ、母親として、子どもたちを単純に比較するのではなく、その違いを大切に受け止めていきたいと思うようになりました。

これから二人がどのように成長していくのか、それぞれの育ちを見守りながら過ごしていきたいと思ふ毎日です。

(十文字学園女子大学准教授)

#### 参考文献

1 天野清著『子どものかな文字の習得過程』秋山書店  
一九八六年

2 中沢和子著『イメージの誕生—〇歳からの行動観察—』  
日本放送出版協会 一九七九年